

2018 年度 立命館附属校 教師塾（新任研修）Ⅱ

附属校教育研究・研修センター

5月8日（火）朱雀キャンパスにおいて、附属校教育研究・研修センター主催「教師塾Ⅱ」を、キャリアガイダンス編集長 山下 真司先生を講師にお迎えして実施した。

参加者は、19名（立命館中高3名、立命館小2名、立命館宇治中高5名、立命館慶祥中高3名、立命館守山中高6名）であった。

《山下先生講義内容》

① 新たな社会のあり方、必要とされる能力

AIの台頭により、これまで人間が担っていた仕事が次々と機械化されており、今後10年間で47%の仕事が自動化されると予想されている。とある化粧品会社では従業員1名とヒューマノイド2台で生産ラインを回している。そして、そのヒューマノイドのランディングコストは、30代サラリーマンの平均年収よりもはるかに安いのである。つまり、AIが得意とする単純な反復作業や計算、記録などにおいて人間は能力、コストの両面で劣るのである。

これからの社会で人間が生き抜くためには、「コミュニケーション」「主体性」「身体性」「創造性」のようなAIでは補えない能力を伸ばす必要がある。今や社会や企業が求める力は「競争」から「共創」へと変化している。そして、保護者・教員は、生徒に必要な能力として「主体性」「実行力」「発信力」とあげているが、実際に持っている能力は「規律性」「傾聴力」などと感じ、ギャップが生じている。大学入試改革が行われる背景には、このような社会で求められる力の変化がある。

② 大学入試 新テストの傾向

従来の文章読解や暗記系と違い、生徒の発想や表現力が問われるテストが案として挙げられている。また、様々な大学で推薦入試がより多く取り入れられるようになり、生徒のコミュニケーション能力や主体性、そしてこれまでの経験などが評価されるようになる。従って、調査書、推薦書、志望理由書などでより詳細な記録が必要となり、「ポートフォリオ型入試」と呼ばれる新たな形態の試験へと変わっていく傾向にある。早稲田大学の「新たなじゃんけんを考えなさい」という入試などは、常識に捉われない新たなアイデアの創造を求める入試の最たる例である。

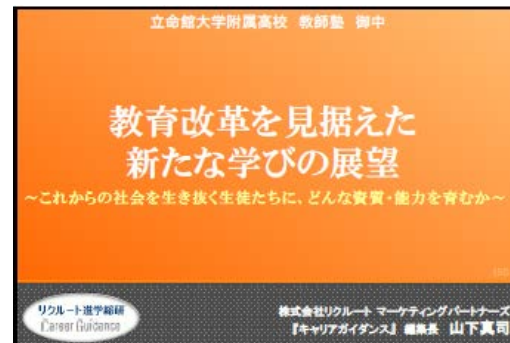
③ 授業における様々な実践事例

上記のような力を生徒に身につけさせるために、生徒同士が教科書をベースに教えあう授業など様々な学校が工夫を凝らしている。また、ノートまとめを生徒が自分で行き、教員は毎日ノートチェックを行うなど、ポートフォリオを重要視した指導を行っている教員もいる。

特色のある教育としては、「地方から世界へ羽ばたく人材を養成するSGH」として宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校、島根県立隠岐島前高校などが紹介された。地元問題の解決策を模索することから世界の問題に視点を広げる地に足をつけたグローバル教育が実践されていた。

④ 私たちが教員として意識すべきこと

「Start」「Stop」「Continue」を考え、これからの教育活動において私たちは何が必要で、何が不必要か取捨選択する必要がある。教師としての「Will」を持ち、実行し、社会で生き抜く力を生徒に背中ですすことが大切であると教えて頂きました。



（記録 立命館宇治中高 水谷圭吾）

（編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄）